

し、榮徒を誘うて己に同心せしめた。是を以て長吏澄榮以下は、政親と連衡して敵の蓮臺寺城を陥れ、後小原山・龍藏寺・白山拜殿等に於いても交争があつた。この政親・幸千代の内訌に關する白山宮莊嚴講中記録の記事は、行文極めて澁晦であるから、古來その解釋を誤るものが多い。蓮如上人御法語の傳へる所によれば、この時本願寺派の門徒は政親の與黨であつた。これより後の幸千代の動靜に關しては甚だ明瞭でないが、彼は京師に上つて幕府に運動し、加賀半國横領の目的を達せんとしたかに思はれる。何となれば親長記文明八年九月十四日の條に、親長が富樫幸世の許を訪うたところ、近日加賀半國拜領の事あるを傳聞したとあつて、この幸世は幸千代の一字を脱したので見えるからである。しかも此のことは遂に風聞に止り、政親が連りに物を進獻して將軍に近接したことは親元日記に記されてゐる。

トガシシヨウ 富樫庄 石川郡に在つた。東寺文書應永二十年藏人所牒に加賀國富樫庄が見える。明應以後の石川郡善性寺文書に、單に本庄と記されるものも富樫庄の意であるといふ。

トガシシヨウ 富樫庄 石川郡に在つて、藩政時代では米泉・西泉・泉・泉野泉野新(天保中から地黃煎)・泉野出・泉野十一屋・長坂新・横川・久安・有松・圓光寺・寺地・窪・法島・伏見新・山科・平栗・別所・蓮花・野田・大桑・三小牛・山川・馬替・高尾・大額・額新保・額谷・額乙丸・矢作・富樫新保・小原野々市・三十町・上新庄・下新庄・坂尻・四十萬・曾谷・後谷・坪野・清瀬・倉々嶽・中戸・天池・樫見・大平澤・小平澤・國

見・堂・粟田新保・住吉の五十三ヶ村を含んでゐた。金澤の城下に入つた有松町・泉新町・泉町・野町・奥力町・沼田町・林町・地黃煎町・泉野寺町・十一屋町・野田寺町等は皆もと富樫庄の一部であつた。

トガシシヨウ 富樫城 石川郡野々市にあつた富樫氏の居館で、富樫館ともいふ。源平盛衰記壽永二年に『五月二日加賀國へ亂入處に、源氏の軍兵安宅の渡に城郭を構ふといへども、彼をも攻落畢ぬ。林・富樫が二箇所の城を打落しぬれば、北國は今は手の内と可被思召云々。』平家物語に、『平家やがて加賀國へ打越富樫・林が城郭二ヶ所焼拂ふ。』義經記に『辨慶は富樫が館のやうを見て参り候はんと云々。』應安二年十二月得田加賀介章房の軍忠狀に、『北國爲御退治御下向之處、桃井中務少輔凶徒加州平岡野陣取、依及富樫城々野難儀。』など、ある。ノイナカンセキ 野々市館述。

トガシシホ 富樫新保 石川郡富樫庄に屬する部落。
トガシスワジシヤ 富樫諏訪神社 石川郡野々市に在つた。式内等舊社記に、『富樫諏訪神社。富樫郷布市鎮座。稱富樫惣社也。其地曰諏訪森諏訪野。舊社也。』とある。又富樫郷住吉神社とも言うたが、大正三年改めて布市神社と稱した。

トガシタカイへ 富樫高家 家明の子。建武二年足利尊氏の北條時行を驅逐して鎌倉に入るや、遂に反志を露して京師に歸らず、既にして諸國之に應ずる者多かつたが、加賀の富樫高家も亦その一人であつた。延元元年後醍醐天皇尊氏の爲に花山院に幽せられ給ひ、

三條刑部大輔景繁が之に従うてゐた。景繁乃ち勾當内侍によつて天皇に申していふ。今や新田義貞等越前金ヶ崎城を固守し、攻圍の敵軍展利を失うた。是を以て加賀に在つては、劍・白山の衆徒遙かに官軍に應じ、既に富樫高家の據守する那谷城を陥れ、久しからずして援軍を金ヶ崎に出すであらうといはれる。先に龍駕還幸の際供奉して京に入つた輩も、亦この風聞を得て欣喜に堪へず、將に各その國に歸つて義兵を擧げんとしつゝあり、天下の形勢一變すること近きにあると思はれる。されば願はくは天皇御かに大和に蒙塵し給ひ、繪旨を諸國に下して義兵の奮起を促し、

以て義貞の忠志を輔け、皇運の恢復を計り給へと。天皇遂に微慮を決し、十二月廿一日夜に乗じて賀名生の行宮に遁れ給うたといふのである。しかし白山衆徒が那谷城を占領したとの説は、實際その事があつたのか、或は景繁が天皇を鼓舞し奉るが爲に作爲したのか、全く明らかでない。延元二年三月金ヶ崎陥つて、義貞は柚山城に據つたが、義兵再び來り集つて、三年(曆應元)に入り軍容大に熾となり、上洛の期將に近からんとした。殊に越後には元弘以降義貞勅恩の地であつたから、國人大井田彈正少弼は義貞の軍に合せんと欲し、七月三日國府を發して越中に入つた。越中の守護普門利清之を阻止する能はず、退いて松倉城を保つたが、大井田は敢へて之を追はず直に進んで加賀に入つた。因つて富樫高家は五百餘騎を發して、安宅・篠原に越後軍を邀撃したが、衆寡固より敵せず、兵二百餘を失うて那谷城に退いた。金勝院本太平記には、此の時高家は在京であつたから、一族額齋藤

四郎用家之に代つて高松濱に懸合ひ、奮戦の後遂に敗れて那谷城に入つたとするが、地理に於いて滅裂である。この後の高家の行動に就いては諸書に記す所がない。又阿波國坪内文書に、高家が觀應二年辛卯正月に戦死したと見えるが、その細故を得ぬ。

トガシタネハル 富樫種春 ↓トガシヤス トシ 富樫泰俊。

トガシタネヤス 富樫種泰 泰高の養子で、加賀介と稱した。明應二年將軍足利義種が、細川氏の爲に幽せられたのを脱して越中に下つた時、種泰が之を援助したことは、大乘院寺社雜事記に、『八月十一日高矢辻子此間自北國罷歸。將軍御所は越中に御座。七月一日に江州に御下向、自其越中御下向也。其後能登國守護參申、加賀國司參申。』とあるによつて知られる。加賀國司は種泰のことである。種泰が亡命の義種に黨したのは、是より先細川政元が足利義澄を擁立した際、赤松政則の功を賞して、その舊領加賀半國を安堵せしめんことを約したから、種泰は義種に憑つて之を確保しようと思つたものと思はれる。幸に政則はその辭令を得て自ら快とし、盛宴を張り進物を獻つたに止り、この一揆國を固持せんと努力しなかつたのみならず、五年四月歿したるを以て、本願寺門徒によつて保護せられた種泰は、兎に角その地位を失はざることを得た。享祿二年本願寺の家宰下間頼秀加賀に來り、國中の宿老と不和を生じて相戦ひ、四年大に之に勝つた。是に於いて種泰及びその子泰俊等、宿老と舊縁ある者皆越前に走り、金津城主溝江大炊介長逸に寄つたが、その後種泰は天文四年五月二日歿し、次子晴貞加賀

此の時高家は在京であつたから、一族額齋藤